

運動会を考える

編集部 辻内俊哉（佐野支援学校）

1. はじめに

大阪都構想の投票前日、宣伝カーの声がコロナ対策で開けている窓から飛び込んでくる。そのような中、兵庫から岨さんも駆けつけ、久しぶりとなる研究部例会が行なわれました。

2. 研究部からの問題提起

研究部はこの例会に先立ち、「運動会アンケート」を行なっています。回収率は16人と少なめでしたが、集計を研究部員がする中で、どこが問題だったかを分析し、問題提起としてまとめています。少し引用します。

(1) コロナ禍から見た運動会の問題点

確かにコロナウィルスの蔓延によって、学校運営は様々な場面で支障をきたした。学校行事である運動会も例外ではない。しかし、

①運動会開催の時期や開催時間等の流れは一定できつつあった背景もあり、その中で「改めて運動会とは」が問われているような状況はなく、同志会会員もそこに言及していない実情がある。

②そのような状態の中で運動会の反省が行われ、時間の事や段取りなどを中心に総括されていることに、職場内で「それだけで良いのか？」と問い直したり言及したりするものがない。

③したがってこういう緊急事態と言う状況下でそもそも論の発想すらなくたとえ誰から誰が唱えても受け入れられず、いかに、運動会の反省などが形骸化しているのがわかる。

など学校内で「運動会」の意義づけやそれに伴う位置づけが十分に話し合われていないことがこの問題の発端とも言える。さらに、

④教育委員会直轄の命令的な指示があるところ、ないところ、ないならないで、「どうして上から指示がないのだ？」という声も聞こえてくる。カリキュラムは「学校で計画決定する」ということ自体の形骸化、すなわち、教育課程づくりやそれに伴う学校運営そのものも形骸化しており、そこへの異論も現場も職場からなかなか出てこない。

と、運動会から見える教育課程、カリキュラム、学校運営のある種「アリバイ作り化」と、学校行事の代表格である運動会は、密接な関係にある。すなわち、その学校の運動会の姿から教育過程が見えてくる、と言う状況がある。やはり「たかが運動会」ではない。そこで、再度「運動会の価値」について見直さなければならない。

(2) 子どもが主人公の運動会とは

研究部の中村が「運動会の価値」について集約した感想で、「先生たちの運動会の価値を持っておくのは大切だが、子どもたちがここまで思わないと思ったら考えようだなと思った」と述べている。よく「子どもが主人公」という言葉が同志会でも使われるが、主人公である子どもが「運動会」にどのような価値づけをしているのだろうか。教師の俯瞰的な視点と主人公である子どもたちが持つ「運動会の価値」とのすり合わせがどれだけできているだろうかという点である。（中略）「望む

ようにしかけることが一番」であるかもしれないが、これとて、運動会という行事だけにたよることはできない、運動会に至るまでの様々な教育活動によって子どもたちから見た「運動会の価値」が規定されるはずである。このことも忘れてはいけないと思っている。
(以上、研究部の問題提起から抜粋引用)



3. 安武さんの「運動会の歴史まとめ」

が秀逸！

続いて安武さんから『運動会』の歴史から、その意義を探る」というテーマで報告がありました。(下線は引用部分)

江戸時代には、すべての階級を通して、運動娯楽の価値に注目し、これを体育的に発展させる余地は存在しなかった。すなわち、「読み・書き・そろばん」は学問として認められていたが、体のことは、それぞれの武術系の流派の問題。遊戯、遊びも禁止。まさに「門外不出」として、広く学ぶ文化がなかった。

明治になって体や遊びを注目するようになる。

そして、明治後半、今の運動会の要素が出そろったようです。大事なポイントとして、遊戯・娯楽の少なかった頃、そのおもしろさにふれた子どもや教師・親たちは、我国の風土になじませていき、また行政側も規律・訓練の手段とすべく全国的に広めていった、という経緯があったようです。それが戦前・戦中には戦意昂揚(こうよう)オンパレードになってしまいました。

戦後の運動会の特徴は

- ・児童、生徒の自主性をもとに計画立案や運営にも参加させようとした
- ・親の参加、地域とのかかわりの強化

からスタートしていますが、同志会創始者の丹下は、運動会が「体育学習の成果を発表する」場となることに批判的だった。その理由として

- ・「特別に学習の成果を良く見せようとすることの無理な学習の弊害」が生じ、
- ・親たちはそのでき具合一に喜一憂することになり
- ・児童会はその発表会のための仕事をするようになってしまう

運動会は「父母、子ども、教師が一体となった地域の人間の交流の場」であるべきと述べた丹下には先見の銘がありました。

運動会割り当て時間、全部使わなくてもいいが使ってしまふ。よく見せようとする教師の心理を丹下氏は言い当てていたことになります。

せっかく自治的な要素を含んで発展しそふだった運動会ですが、自治とか自主性を日の丸君が代の導入とともに、文言から減らしていった経緯がありました。

現在、授業時数はいったん減って元に戻ったが、特別活動は減ったまま。他の教育活動が増えていて、ますます子どもの自治をはぐくむ時間が取りにくくなっています。

質疑の中では、「今、子どもの主体性が問われる中、同志会は運動会に対する対案がない。」という意見も出されました。

4. そして注目の岨さんの運動会！



岨さんは南あわじ市の神代(くましろ)小学校で「子どもたちが作る運動会」を実践しました。(その様子はNHKのニュースウォッチ9でも紹介されています)

本来、5月下旬に予定されていた運動会。コロナ禍ですべて吹っ飛び、岨さん自身も「まあ、仕方ないな」と思っていました。

しかし、休校中に綴った子どもたちの日記を見るうちに、「みんなと勉強がしたい」「友だちと過ごしたい」という子どもたちの強い思いに気づきます。

私たちがコロナに振り回されている中、本当に大切なことに目を向けはじめていたのは、目の前の子どもたちでした。こういった子どもたちの要求を目の当たりにし、「教育の本質」について子どもたちから改めて教えられたような気がしました。「こんなときだからこそ、子どもが本当にしたい学び」について考え、実践していかななくてはいけないのではないかとそう思うようになりました。

(実践報告資料より)

また、不登校気味だったにもかかわらず、時々休みながらもなんとかがんばって登校しているRさんの存在も気になりました。

Rさんは日記の中で「自分たちがリーダー

となって活躍できる運動会がなくなって悲しいです。」「当たり前を大切にしたい。」と気持ちを述べていました。そのような思いから今回の実践はスタートしています。

5. 運動会から「くましろ祭」へ

「運動会からくましろ祭へ！」取り組みの概要は以下の通りです。

Rさんを実行委員長に！

教師がRさんの居場所をつくるのではなく、Rさん自身が友達や大人との対話を通して、違いを認め、ともに学んでいくことで自分の世界を広げ、生活を豊かにしていってほしい。

理解ある職場

特に5年生の担任(特活・児童会担当)は「児童会は任せてください。5年生もできたら運営などにも加われたらとてもいい経験にもなるし、来年度につながっていく。」と協力的。

また、「やろう！やろう！ぜひやりましょう！子どものためになるんだから！（校長）」「チャンスですね。これからの運動会を考えるととてもいい機会になる。子どもたちが自ら創っていくような、子ども主体の運動会にしていきましょう。(教頭)」と管理職の理解もありました。

コロナ対策を子どもの学習に

コロナ対策についても、岨さんは子どもと共に学ぶスタイルを取りました。「コロナの学習」で先駆的实践を行なっている上野山さんを講師に、校内WEB学習会を行なったのです。単なる対策としてではなく、コロナそのものについても学習の対象とする機会となりました。

各委員会を組織

6年生で実行委員会を組織。実行委員は「校長交渉」「保護者へのお願い」「閉会式、開会式の司会」「選手宣誓」「テーマの検討」などの役割を担うという活動内容を計画しました。他にも、児童会は、「開閉開式」や「応援合戦」

「入場行進」「放送原稿」「引き継ぎ式」の規格をしています。次年度につなぐことも考え、引き継ぎ式は重要な位置を占めています。

今回は「コロナ対策部」という委員会も設置されました。当日のコロナ対策、各演技でのコロナ対策の確認のみならず、啓発活動としての「感染症発表」も企画しています。

南中ソーランの教え合い

全校演技は実行委員会のアンケートから「南中ソーラン」に決まりました。「低学年で南中ソーラン？」という考えもあるかもしれませんが、今回はみんなで取り組むことと、高学年が低学年に教えに行くことを重視しました。6年生の見本ビデオを配ったり、1、2年生は6年生が踊りを教えに行きました。休み時間や帰りの会の活動になるのですが、子どもたちも主体性を発揮できたいい時間でした。

当日の様子

準備やリハーサルの時間もほとんどとれない中、運動会はスタート。それでも、6年生は自分たちの役割を意識し、アドリブも含めやりきりました。参観した保護者からも「子どもの自主性は大切。家では運動会のことをよくしゃべるし『どないしょ』『どうしたらええん』とよく相談されました」家庭もあったとか。「ニュースウォッチ 9」視聴された方は、子どもが主体的に作り上げていった様子がわかると思います。

来年度に向けての課題

今回はコロナ禍の中での特別な実践でした。なぜ、岨さんがリーダーシップをとって企画運営の中心になることになったのか。それについて岨さんは「自分がそもそも体育担当で、運動会は自分から発信する立ち位置にあったが、さらに6年生担任でもあったというところから今回の提案になった」ということです。しかし、次年度、「今回と同じ取り組みをしようとしたら、5月下旬の行事では無理がある」と岨さん自身が感じているところです。今まで教師主導で決めてきた運動会の企画を子どもたちが主体的に動く行事に作り替えるチャンスでもあり、次のくましろ祭が楽しみです。

参加者の感想から

・なくなった行事を復活させるだけでなく、むしろバージョンアップさせているところがすごいです！！岨さんの熱量、子どもたちへの投げかけ、準備期間、役割分担など、学ぶべきところがいっぱいあって、自分たちの運動会と比較できました。めちゃくちゃしんどかったでしょうけど、それ以上に楽しかったのでは？と思いました。うらやましいです😊
また支部大会で聞けるのを楽しみにしています。
菅さん

・子どもたちの声を聴くって、すごく大事なな～って、改めて思いました。運動会のテーマを作るのは、苦しみやと聞いて、そこには子どもたちの、たくさんの思いや葛藤があるから、そうなっちゃうんだと思いました。
うちの学校は、テーマがあっても、本当にその意味をなしていないのがすごく残念です。校長自身も全くそのことに触れなかったもので、子どもの思い無視してんな…と。
中村さん